

「うれしかった、心に残った支援」

たばた はやと
田畑 快仁

(神奈川県 弱視ろう)

5月1日～3日、鹿児島に行った。私が生まれて初めて一人だけで飛行機に乗った旅行だった。私には先天的に弱視ろうの盲ろう障害があるが、いつか一人で旅行に行きたいという夢があった。私は去年の4月に20歳になった。だから、自分だけで行動をするなど、たくさんすることに挑戦をしたい気持ちがより強くなった。盲ろう者が、自分だけで行動をし、コミュニケーションをすることには、確かに困難がある。しかし、日ごろ私は、筆談でコミュニケーションをするなど、障害の有無に関わらず様々な人々と意思疎通をすることを積極的に行っている。ある盲ろう障害の先輩から、一人旅の経験談を聞き、具体的な工夫の方法など教えてもらった。先輩の話聴き、私も自分で自由に旅行の計画を考え、実行したい気持ちがより強くなった。

まず自分で旅行の日程、場所、時間などの予定表を書き、盲ろう者通訳・介助員派遣依頼を

した。鹿児島空港に着いてから、通訳・介助員からの支援を受ける。旅行の当日、羽田空港のカウンターで職員に誘導介助の依頼をした。私は事前に、自分の障害と必要な配慮についてメモに書いていた。そのメモを見せたが、空港のカウンターの職員は普通に話し始めた。しかし、私は耳が聞こえないので、声を聞くことができない。「聞こえない」と身振りで示すと、職員は急いでボールペンで書いた紙を私に渡した。しかし、私には、文字が細くて見えなかった。「見えない」と示すと、太いペンでメモを書いてくれたので、ようやく通じた。航空会社の職員は、盲ろう者に会ったことがないのかもしれない。盲ろう者への理解が足りないと思った。しかし、とにかく一生懸命耳が聞こえず、目もよく見えない私に通じるよう努力をしてくれた。私に伝えようと様々な工夫をしようとする気持ちが、とても嬉しかった。また、私の障害配慮の書き方も良くなかったのかもしれない。例えば、相手が読みやすいようにパソコンで打った文章を、小さな文字に変えてプリントしたが、私が見える大きな文字のままプリントした方が、必要な大きさを伝えやすいのかもしれない。その後、羽田空港の搭乗口まで職員から誘導介助をして

貰った。飛行機に乗った時、私の隣に座った男性とCAさんからタブレットに文章を書いて貰った。具体的には、機内で注意が必要な点、鹿児島空港に着く時間と好きな飲み物など文字を書いてくれた。周囲の人々が筆談をしてくれることに感謝した。盲ろう者のことを知らない人がたくさんいる。しかし、私のような当事者が障害への配慮を受けることで、盲ろう者の理解をする人が少しずつ増えていくのかもしれない。

私は鹿児島市に住んでいる叔父と叔母の家に泊まった。盲ろう者通訳・介助員が、叔父の家で、私にシャワーの使い方、水の流し方などを通訳してくれた。そのお陰で、慣れない家でも自分で行動をすることができた。そして、5月2日の夜、大勢で夕食をとった。通訳・介助員を含めて、7人が集まった。その時、一番印象に残ったことは、盲ろう者通訳・介助員が私に親戚たちの会話の内容を通訳してくれたことである。通訳を受けたお陰で、4年前亡くなった私の父方の祖母の思い出を親戚が話す内容を理解することができた。私が生まれて初めて家族と一緒に鹿児島に行ったのは、5歳の時だった。鹿児島に住んでいる叔父は、その時から今までたくさんのビデオを撮っている。ビデオを見な

がら、皆で祖母の思い出話をした。その中に、私と亡くなった祖母と一緒に踊るビデオがあった。小さかった私が、1人で鹿児島に来ることが出来るようになったことを、みんなが喜んでいて。私は亡くなった祖母が使った黄色の座椅子に座りながら、皆の話を聴いた。通訳・介助員が通訳してくれたお陰で、亡くなった祖母の思い出について、会話に加わることが出来てとても幸せだった。親戚の中には、手話に興味をもってくれた人もいる。以前、私が教えた挨拶などの手話を覚えていてくれた。盲ろう障害があるが、私は親戚の会話の中にいた。私は6年前、ニューリーダー研修で鹿児島県盲ろう者通訳・介助員に偶然出会った。それがきっかけで、鹿児島県の盲ろう者と通訳・介助員との交流が続いている。祖母の葬儀、法事など、盲ろう者通訳・介助員からの支援を受けるお陰で、親戚とのつながりが深まった。

今まで私にはたくさんの困難があったが、多くの人々と出会い、交流をすることができた。たくさんのことに挑戦してきた。だから、これからも積極的に多くの人々と交流をしながら関係を築き、新しい挑戦をすることができるのを楽しみにしている。